

発声指導法研究 : 児童への指導

宮下 茂*
(平成22年10月29日受理)

The Vocalizing Guide Method Research :
The vocalizing guide to the children

Shigeru MIYASHITA*
(Received October 29, 2010)

はじめに

筆者はこれまでに、平成15年6月に行なった児童に対する発声指導の内容を、「発声指導法研究(1)」(註1)と「発声指導法研究(2)」(註2)に於いて述べた。当時の筆者にとって児童への指導は初めての経験であり、それまで学生や生徒に行ってきた発声指導と異なり、児童の理解を得られる伝達表現を必要とし、発声指導の内容と合わせて、指導の伝達について多くを考える機会となった。

その指導は音楽の授業としてではなく、歌うことの好きな児童が自主的に参加するクラブ活動での発声指導であった。その為、標準的な児童への発声指導とは、必ずしも言えなかった。

筆者は平成18年度より、文化庁の学校への芸術家等派遣事業の講師として島原市立第一小学校へ派遣されるようになり、毎年4年生への発声指導を行ってきた。そのような中、平成21年度の派遣事業に於いて、歌声作りの初期段階の児童への指導を行う機会を得た。本論文の指導は、その初期段階の児童への指導であり、その指導内容は短時間の内に児童の歌声の質を変える試みであった。

この指導を通して、児童の歌声に対して筆者が何を考え、言葉を表し、指導を行なったかを今回の論文で述べることとする。それにより筆者の考えを明らかとし、児童を対象とした発声指導のための助言となることを願うものである。

島原市立第一小学校に於ける発声指導

今回の発声指導は、島原市民音楽祭参加に向けて練習中の4年生の2時間続きの音楽授業であり、平成21年10月15日に行われた。

*長崎大学教育学部

4年生は2クラスからなり、男子45名、女子44名、合計89名が合同で合唱と器楽演奏を行っていた。

指導を担当している中村由佳里教諭によると、児童の歌声は指導の初期の段階であり、筆者に自由に指導して欲しいとのことであった。

尚、今回の演奏会に向けての曲目は、「Smile Again」(中村真理作詞作曲)の合唱と、「明日があるさ」(中村八大作曲、橋本祥路編曲)と「ルパン三世のテーマ」(大野雄二作曲、山下国俊編曲)の器楽演奏であった。

児童の歌声の第一印象

指導に先立ち、児童の歌唱を聞き、実際の歌唱を通して歌声の特徴を聞き取り、その印象から、その日の発声指導の課題と目標を考えることが筆者の習慣である。

まず、児童が練習中の「Smile Again」の歌唱を聞いた。

その歌唱の印象では、よく声を出して歌うが、その反面、頑張っただけで歌い過ぎていた。具体的には、以下の印象であった。

1. 児童の歌声から、集中して歌おうとする意識が感じられる。
2. 児童の歌声から、しっかりと声を出そうとする意思が感じられる。
3. 児童の歌声から、明るい硬く平たい声質を感じる。

児童の歌声から、歌唱への集中力と自から大きな声で歌おうとする意思の強さが感じられたが、残念ながら結果として、児童の歌声は甲高く、響きを感じさせない、喉声になっている歌声といえた。

発声に関する課題と指導目標の決定

児童の歌唱を聞き、筆者は幾つかの課題(問題点)を見つけ出し、その課題(問題点)を解消することを、当日の指導目標とした。

筆者は、以下のような課題(問題点)を挙げた。

1. 児童の歌唱から、突っ張った印象が感じられる。
2. 児童の歌唱から、直立不動の歌唱姿勢が見て取れる。
3. 児童の歌唱から、抑揚のない歌声や一直線な歌声を感じてしまう。

これらの課題(問題点)から、以下の目標を挙げた。

1. 児童の歌声から、柔らかさを感じられるようにすること。
2. 児童の歌声から、動きを感じられるようにすること。
3. 児童の歌声から、流れを感じられるようにすること。

指導内容についての考察

発声指導により導き出そうとする児童の歌声は「自然な声」であるべきと、筆者は考えている。その「自然な声」は、不必要な力みのない状態で発せられるべきである。

同時に児童の歌声は、「音楽的な声」であるべきと考えている。

それら自然で音楽的な歌声は、聞く者に「柔らかさ」を感じさせる。

歌声の柔らかさは、体の柔らかさから生じ、音楽の柔らかさを感じさせると、筆者は考える。

また、自然で柔らかな歌声は、「動き」を感じさせる。

歌声の自然な動きは、体の自然な動きから起こる呼吸から生じ、歌声の動きとなり、音楽の動きを感じさせる。

同時に、自然で柔らかな動きのある歌声は、「流れ」を感じさせる。

体の自然な動きが起こす呼吸は、息の流れを生じ、歌声の流れとなり、音楽の流れを感じさせると、筆者は考える。

以上のような考えから「柔らかさ」「動き」「流れ」の3つの目標を立て、指導に当たった。但し、器楽演奏の指導もあったため、発声指導に与えられた時間は約30分であった。その為、発声指導と歌唱指導とを合わせ、3つの段階に分け、効率を上げるように行うこととした。

歌唱指導の手順

実際に児童への指導を開始するにあたり、筆者は以下の手順で指導を行うこととした。

1. 歌唱への気持ちを残したまま、冷静に考えながら歌唱させる。
2. 体の強張り（緊張）を解しながら、必要な力を入れて歌唱させる。
3. 喉の開いた柔らかな歌声で歌唱させる。

歌唱指導1：歌唱への気持ちを残したまま、冷静に考えながらの歌唱

児童の演奏から、歌唱への気持ちが強過ぎるために声を出し過ぎ、いわゆる「歌い過ぎる」状態にあると判断した筆者は、気持ちを逸らす工夫が必要であると考えた。

そこで、児童が歌唱している「Smile Again」の歌詞に着目した。

歌詞の中で、「じぶんが...」「じぶんだけ...」等、「自分」という言葉が繰り返して出る。その歌詞に合わせて手を動かし、「自分」と歌唱する時に、自分を指さすことを考えた。筆者の予想では、歌唱に集中している児童は言葉を歌った後に指さすと考えた。（図

1）



(図1) 指をさす位置(指示前)

実際に行ってみると、ほとんどの児童が予想通り、言葉を歌唱した後に自分を指さしていた。

そこで「言葉の後に手を動かさずに、言葉と同時に手を動かしましょう」「先に歌詞を考えて、歌と同時に手を動かしましょう」と指示を行った。(図2)



(図2) 指をさす位置(指示後)

初めは戸惑って間違える児童もいたが、全員がその行為に興味を示し、思いおみのタイミングではあるが、すぐに言葉と同時に自分を指さしながら歌唱するようになった。

続けて「そらが...」「わらって...」等、手を動かしやすい言葉を選びながら、歌唱の指示を行った。(図3)

以上の指導の結果、児童は必要以上に声を出し過ぎずに歌唱するようになった。

その歌唱の印象も、言葉と気持ちが表現されているように感じられた。

歌唱指導2：体の強張り(緊張)を解しながら、必要な力を入れての歌唱

当初の演奏では、児童は体を強張らせ、直立不動の姿勢で懸命に歌唱していた。

「歌唱指導1」を行った結果、児童から歌唱の際の緊張が解れてきたのが見て取れた。

そこで、続けて柔軟体操を行い、余分な力みを更に解し、その上で必要な力を入れる指導を行った。

筆者の行った柔軟体操は、大学生時代に合唱授業で田中信昭先生が繰り返し行っていた体操であり、その中でも特に楽しんで行える部分を選んでいる。(図4)

柔軟体操に関しては、どの様な体操でも目的に適うと考えられる為、ここでの説明は割



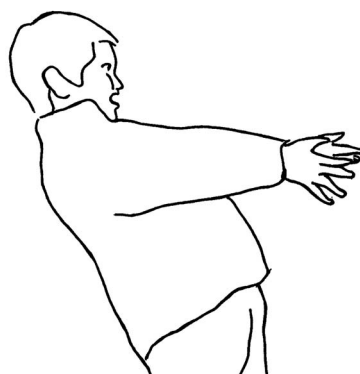
(図3) 「じぶんが...」を歌唱する様子

愛する。

次に、体の力が解れたところで、必要な力が入るように姿勢を整えた。

体を上方に伸ばし、体をつっ張るように立つ姿勢が効果的であると、筆者は考えている。(図5)

以上の指導の結果、歌唱時の児童の姿勢は、体の伸びを使って姿勢を保っているように見えた。そして、歌唱も 支え のある印象に変わった。



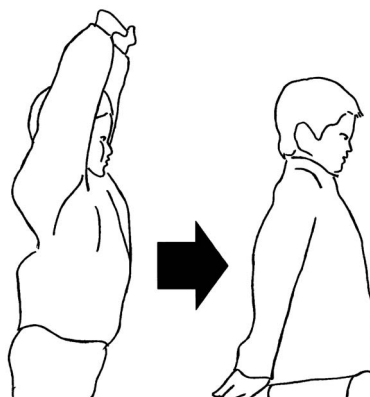
(図4) 柔軟体操の様子

次に、喉の開いた状態の柔らかな歌声を出すための指導を行った。

その内容については、前述の「発声指導法研究(1)」「(註1)」と「発声指導法研究(2)」「(註2)」に於いて詳しく述べている。

筆者の発想は、自然な感情の変化によって生じる声を意識的に出し、発声のための状態の変化を利用して歌唱することにある。そこで出す声は「他人を脅かすことを目的として発せられる声」であり、その結果 喉の開いた状態 が準備でき、そのまま柔らかな歌声を出すことも可能であると考えている。

以下に指導の手順を示す。



(図5) 体を伸ばす体操と伸びを使って姿勢を保つ様子

自然な声で、短く母音「ア」を発音させる。

「他の人のいたずらを、注意するように」、「びっくりさせるつもりで」、「意地悪をするつもりで」等のイメージを持たせて、太く、力強い母音「ア」を、長めに発音させる。

自然な母音「ア」と力強い母音「アーツ」を交互に発音させ、それぞれの発音時の特徴を、体で感じられるように指導する。

力強い母音「アーツ」が発せられる直前で、口を開いたまま、止まるように指示する。この止まった状態を、「おどかす真似」と呼ぶことを説明する。

「おどかす真似」を練習させる。

「おどかす真似」をしたまま、軽く、明るく、母音「ア」を発音させる。

上記の指導の結果、児童は喉を開いたまま、母音「ア」を発するようになった。

その声は、明るい響きを感じさせる、息の音や雑音の混ざっていない、円やかな声である。

その「おどかす真似」を吸気の状態に変え、その状態を変えないように注意しながら歌唱を続けるように指示を行った。

おわりに

以上が今回行った，児童への発声指導の内容である。

指導の結果について，残念ながら児童へのアンケート等を取る機会がなかったが，今回の指導を終始見学していた，音楽を専門とする立花博校長より，「指導開始30分で，子供たちの歌声が変わった」「問題を抱えた難しい児童の表情が，別人のように輝いて楽しそうに歌っていた」等，コメントをいただくことができた。

筆者は，今回の指導経験を基に，更なる児童への指導を試みる所存である。

註 釈

(註1) 宮下茂「発声指導法研究 : 児童への指導(1)」: 長崎大学教育学部教科教育学研究報告 第42号, 平成15年3月

(註2) 宮下茂「発声指導法研究 : 児童への指導(2)」: 長崎大学教育学部教科教育学研究報告 第43号, 平成16年3月